



WINPEC Working Paper Series No. J1501
May 2015

日本文学における日仏共同研究の可能性

和田博文

現代政治経済研究所
(Waseda INstitute of Political Economy)

早稲田大学

日本文学における日仏共同研究の可能性¹

和田博文(東洋大学文学部教授)

(1) 日本人のパリ体験の研究 I ——『言語都市・パリ 1862-1945』(2002年)と『パリ・日本人の心象地図 1867-1945』(2004年)

今日は「日本文学における日仏共同研究の可能性」というタイトルで、15年間ほどのフランスをテーマにした共同研究を振り返り、お話をさせていただきます。研究の未来の可能性を語るのは非常に難しいことです。最近の過去の軌跡を通じて、未来の可能性につながる何かをつかんでいただけたら、大変ありがたいと思っています。よろしく願いいたします。A3のプリント一枚と、パワー・ポイントを使って報告をしていきます。全体は6章に分けました。最初は第1章の「日本人のパリ体験の研究 I」ですが、『言語都市・パリ 1862-1945』(2002年、藤原書店)と『パリ・日本人の心象地図 1867-1945』(2004年、藤原書店)の、二冊について言及いたします。

この2冊は「言語都市」のシリーズの一環でした。最初からパリを研究しようと考えていたわけではありません。日本人の異文化体験を問う作業を、海外の都市に焦点を当ててやってみようと、5人の研究者の共同研究として立ち上げました。その1冊目が『言語都市・上海 1840-1945』という本で、1999年に藤原書店から刊行しています。5人という数字に何か意味があるわけではありません。ただこのシリーズは5人でいこうと決めたので、六冊目の『上海の日本人社会とメディア 1870-1945』(2014年、岩波書店)まで、ずっと5人でやっています。メンバーは少しずつ入れ替わっていますが、これからも5人で研究を続けていく予定です。

最初の本の企画を藤原書店に持ち込んだときに、一般書に近い分量でなければ刊行が難しいかなと思いました。記憶が少し薄れてきていますが、原稿用紙400枚程度の分量を書き上げて、交渉をしたはずですが、だから252頁という、このシリーズでは最も薄い本になっています。社長の藤原良雄さんは、お目にかかってみると、分厚い本が大好きでした。「決定版の方がいい、もっと分厚くしよう」といつもおっしゃるので、だんだん頁数が増えて、5冊目の『言語都市・ロンドン 1861-1945』(2009年)は685頁になっています。娘がそれを見て「こんなに分厚い本は誰が読むの?」と、笑いながら聞いたことを覚えています。さすがに最初から終わりまで通読する人はいないのではないか、必要な頁を開く事典的な読み方になるのではないかと思ひ、その後は少し軌道修正をして、6冊目は486頁と少し薄くなっています。

このシリーズは上海というテーマでスタートし、パリのテーマで2冊出してから、ベルリン、ロンドンに移行しました。最初の上海の本が薄かったので、6冊目で再び上海に戻りました。このときに現地の研究者との共同研究を考えて、復旦大学日本研究センター教授の徐静波さんに参加していただきました。7冊目からは都市ではなく、エリアでないと捉えられない異文化体験の研究をすることにしています。現地の研究者とのタイアップを

¹ 本稿は2015年3月16日に早稲田大学現代政治経済研究所「日本の対外発信」研究部会(主任:砂岡和子氏)において、同名タイトルで報告した内容に基づいたものである。報告の際には、宗像和重氏に司会をしていただいた。

拡大して、今年の一月から台湾の研究者二人と、日本の研究者3人の、合計5人で研究会を立ち上げ、次の本に向かっていきます。今後は基本的に、このスタイルを持続する共同研究になるだろうと考えています。

さて『言語都市・パリ 1862-1945』の口絵の1頁目に、金子光晴の絵を入れました。金子は森三千代との間で、三角関係の問題を抱えていて、二人でパリを目指すことを決めます。ただ十分な旅費を用意できないので、途中で金子が絵を描いて、絵を売りながら行くことにします。結局パリにたどり着くまで、1年くらいかかっています。これはパリのアパルトマンの絵ですが、タイトルの「Mansardeに住む男」の「Mansarde」は屋根裏部屋のことです。屋根裏部屋は最上階ですから、夏は暑くて冬は寒い。またエレベーターが付いていない場合は、荷物を持って階段を昇降しなければならない。家賃は割安になるので、所持金が少ないときは便利な場所です。

シリーズ名となった「言語都市」というタイトルですが、元々はバートン・パイク『近代文学と都市』（1987年、研究社出版）という本で使用された概念です。言葉で描かれた都市という意味です。言葉で描かれた都市を、現実の都市と区別して、それを研究対象にする。ただ言葉で描かれるのは文学だけではありません。だからこのシリーズでは、文学を特権化せず、他の言語表現と横並びで扱っています。

この本の第2部は「日本人のパリ体験」で、各時代の概説と、それぞれの時代にパリで過ごした30人の日本人名が入っています。両方合わせて270頁以上を費やしているので、第2部がこの本の中核になっていることが分かります。つまり西園寺公望から小松清まで、人物中心の構成になっている本です。したがってこのときは人物の選定方法が大切でした。日本近代文学研究の世界での重要度や、有名・無名を基準にしたわけではありません。日本人のパリ体験の単行本と、雑誌掲載記事を、可能な限りピックアップする作業から、私たちはスタートしました。その作業を通して、日本人のパリ体験を考える際の重要人物が浮かび上がってきます。文学者であるか否かにかかわらず、パリの日本人社会の中で、大きな役割を果たした人物が浮き彫りになってくるのです。

日本人のパリ体験を問うもう1冊の『パリ・日本人の心象地図 1867-1945』は、その2年後に出しました。心象地図という言葉は、人文地理学の認知地図という言葉に、かなり近い概念として使用しています。エドワード・W・サイードは『オリエンタリズム』（1986年、平凡社）のなかで、ヨーロッパがオリエントを体験する際のレンズを、「心象地理的、心象歴史学的知識」と呼んでいます。ヨーロッパがイスラム世界を見るときレンズという考え方は、日本人がパリを見るとき視線について考察する際の参考になっています。表紙のカバーに使ったのは、矢本正二『巴里通信』（1943年、築地書店）に挟み込まれていた地図です。フランス語の地図の上に、自分に所縁のあるスポットを、矢本が赤で書き加えています。心象地図という概念を体現した地図ということで、カバーに使用しました。

たとえばセーヌ川の北側に、「アベニウ・トゥキヨ」と書いてあります。これは時代性をよく語っている名称です。第二次世界大戦で日本がフランスと戦ったため、戦後にこの通りはニューヨーク通りに変更されます。さらにその北のエリアには、日本大使館や日本人会の場所が赤で記されています。日本人がよく足を運んだエリアです。それから「パツシイ」と書かれた周辺は、パリの16区にあたります。ここはパリの高級住宅街で、セーフティーが高い場所です。現在でも家賃や物価が高いエリアです。日本人の多くは16区に住んでいました。だから日本人のパリの心象地図を考えるときには、必要不可欠な場所になってきます。

この本の中心は230頁以上を費やした、第2部の「日本人のパリ都市空間」です。都市空間は、「1 エッフェル塔とパツシー」「2 凱旋門からルーヴルへ」「3 モンマルトル」「4 オペラ座界限」「5 カルチェ・ラタン」「6 リュクサンブール公園とサン・ジェル

マン・デ・プレ」「7 モンパルナス」「8 日本館付近とその他の地域」の、八つのエリアに分けて考察しています。

八つのエリアには、139 のスポットや日本人住所が入っています。これらのスポットを選定する際には、前段階で基礎作業を行っています。基礎作業というのは、日本人のパリ体験の文章に記された、すべてのスポット名をチェックするという作業です。次にチェックしたスポット名を集計して、頻度順リストを作成します。日本人の言説で、重要な位置を占めるスポットが、数値として明らかになってきます。それが 139 の項目を選定する基準です。また日本人のパリ体験を考えるとときに大切な人物は、住所が判明した場合に立項しています。本の構成として成功しているかどうかは、読者の判断に委ねるしかありませんが、1 冊の書物の空間に、日本人のパリの心象地図を投影してみたいと考えて作った本です。

本の口絵頁に、「パリの広告」が掲載されています。諏訪旅館や、旅館・料理を売り物にしていた「ぼたんや」が載っています。伴野商店は、パリの日本人商店のなかでは最も有名な商店で、多くの日本人が帰国する前に、この店でお土産を購入しました。短期滞在者や旅行者が宿泊した、ホテル・インターナショナルも掲載されています。研究対象を文学に特化してしまうと、こういうスポットは視野に入りません。しかし日本人の足跡を商店や旅館を通路として追いかけていくと、初めて視野に入る世界もあります。特に日本人社会を考察するときには、これらは重要なスポットです。

別の口絵頁には、画家の海老原喜之助がフランス人女性と結婚して、子供が誕生したときに大使館に届けた、出生届が載っています。評論家の小松清が届けた出生届も、同じ頁にあります。戸籍に関わる出生・死亡・結婚・離婚は、在仏日本大使館に書類が提出されます。大使館はそれを、公文書として外務省に送ります。これらの公文書は、外務省外交史料館に所蔵されています。外交史料館のファイルを端からめくっていくと、有名・無名に関わらず、様々なドラマが浮かび上がってきます。

もう一つ付け加えておくと、公文書に記載された住所を基礎資料として、住所の頻度順リストを作っていくと、日本人がパリの何区に集中的に住んでいたのかという傾向も見えてきます。その分布は、日本人の心象地図を形成する大切なデータです。

（２）日仏共同研究Ⅰ——科研費基盤研究A一般「日本文学における言説編制機能に関する日仏共同研究」（2009年～2012年）と、国文学研究資料館・コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所編『集と断片』（2014年）

次は「日仏共同研究Ⅰ」ということで、2009年から4年間行われた科研の「日本文学における言説編制機能に関する日仏共同研究」と、その結果として2014年に刊行された『集と断片』（勉誠出版）の話をさせていただきます。後者の論集の方から見ていきますと、これは国文学研究資料館とコレージュ・ド・フランス日本学高等研究所の共編という形になっています。

科研の研究代表者は、国文学研究資料館副館長の谷川恵一さんです。この論集は3部構成になっています。谷川さんの「はじめに」という文章に従うと、第1部の「断片から集へ」は日記・詩歌集・説話集などを取り上げて、「〈集める〉」という営みによって作られたテキストの諸相を明らかにしています。続く第2部「体系化される「知」」には、東西の百科思想や全集製作をめぐる論考が収められ、知を継承して新たに編成し直すことが問われています。第3部の「断片のディスクール」では、集成されてもなお断片であり続けようとする、「〈断片〉の多様な生態」が報告されています。

このような構成の仕方には、大人数で行う科研の共同研究の一般的な難しさが、反映し

ているような気がします。4年間の共同研究に携わった日本側の研究者は11人、フランス側の研究者も11人で、合計22人に上ります。日本側の研究者が「執筆者一覧」にご自分でお書きになった専門領域を見ていくと、古典文学、中世和歌文学、中古中世散文学、中世文学、仏教文学、日本漢文学、そして近代文学があります。上代文学と近世文学は入っていません。

つまり古代から現代まで万遍なくカバーするという考え方に基づいて、人選が行われたわけではないように見えます。これは研究テーマとも関係しています。前半の「日本文学における」にポイントをおくと、各時代分野をカバーする方が全体性を押えられるという考え方も可能です。しかし後半の「日仏共同研究」にポイントをおくと、日本とフランスの文化の偏差が、本質的に捉えられればよいという考え方が出てきます。日本側の研究者を組織するときに、国文学研究資料館を中心とする人間関係が反映していたのかもしれませんが。

他方で、フランス側の研究者の所属は、コレージュ・ド・フランス、パリ第七大学、フランス国立東洋言語文化大学（INALCO）、リール第三大学、フランス国立科学センター、フランス国立科学研究所です。それぞれのご専門を見ると、日本文学の方もいらっしゃいますが、日仏交流史、日本仏教、歴史社会学、近世日本思想史、学問史、宗教民族学と、かなり幅があります。パリの場合は相対的に、ジャパノロジーの研究者は充実しています。しかし一般的には海外の一つの国に特定すると、日本学の研究者は人数が限られてきます。大学の組織も多くの場合は、総体としての日本学の学科です。研究者を組織するときに、「日本文学における」と限定すると、困難になってきます。

日本側でもフランス側でも、研究テーマや分野に、ある程度のアンバランスや幅が見られます。そのメンバーで科研を申請することになるので、おのずから論集のタイトルは『集と断片』というような、どの分野の方でも参加できる、包括的で、抽象的なテーマを出さざるを得なくなってきました。このあたりが大人数で行う、科研の共同研究の難しさの一つではないかと思っています。

この共同研究は4年間継続しましたが、毎年1回、東京かパリでシンポジウムを開催して、ワークショップも1回行っています。シンポジウムやワークショップの発表は、論文として本に収録されたものもありますし、一人で複数回発表したため、活字化されずにそのままになったものもあります。

（3）日本人のパリ体験の研究Ⅱ——『ライブラリー・日本人のフランス体験』全21巻（2009年～2011年）

第3章の「日本人のパリ体験の研究Ⅱ」では、私が監修した『ライブラリー・日本人のフランス体験』全21巻（柏書房）の話をさせていただきます。先ほどの共同研究は、2009年から2012年まで、4年間行われていました。『ライブラリー・日本人のフランス体験』は2009年から2011年に刊行されていますので、時期的にはほぼ重なっています。第1章でお話をさせていただいた『言語都市・パリ1862-1945』と『パリ・日本人の心象地図1867-1945』の研究の際に、日本人のパリ体験に関わる単行本と雑誌掲載記事は、幅広く蒐集しています。それを資料集に変換する試みとして、誕生したシリーズと言うこともできます。

全21巻のうちの第6巻は、石黒敬七の巻になっています。この人は早稲田出身の柔道家です。フランス語がほとんど分からないままパリに行きますが、パリでどうしても飯が食べない。それで知人たちが日本語新聞を発行させたら、何とかなるのではないかと考えます。ガリ版刷りの機械をどこかで調達して石黒に渡し、その結果創刊されたのが『巴里週

報』という日本語新聞です。『巴里週報』は結果的に、1920年代後半～30年代前半のパリの日本人の動向を、詳細に記録することになります。

第七巻は松尾邦之助の巻で、「長期滞在者の異文化理解」というサブタイトルを付けています。松尾は1920年代～30年代の日仏文化交流の、キーパーソンとして活躍した人物です。社会学の勉強をするため、パリ大学に留学しますが、結果的にパリで長期滞在を続け、読売新聞社のパリ支局で働いています。松尾は後でお話をします『フランス・ジャポン』という雑誌や、『ルヴュ・フランコ・ニッポンヌ』という雑誌の、編集を行っていた人物です。

今日は「日本文学における日仏共同研究の可能性」というタイトルですが、「日本文学」というのは「」に入れておいた方がいいかもしれません。つまり日本文学という限定をしてしまった瞬間から、石黒敬七や松尾邦之助は関心の外側に消えてしまう可能性が非常に高くなります。先ほどお話をしましたように、日本人のパリ体験という網を広くかぶせておいて、単行本、それから雑誌掲載記事を追いかけていくと、おのずからパリの日本人社会のキーパーソンが姿を現してきます。そのうちの一人が石黒であり、松尾であるわけです。

『ライブラリー・日本人のフランス体験』の全21巻の構成を、少し確認しておきたいと思います。第1巻と第2巻には、『巴里週報』を収録しています。これは石黒敬七の息子さんの敬章さんの所に、大揃いで保管されています。大揃いではありますが、欠号はたくさんあります。今回は石黒敬章さんがお持ちの号を、新組みで活字化しました。本当はコピー版の復刻の方が、間違いは起きません。しかしコンディションの面で、それが困難でした。石黒さんは原資料を、マイクロフィルムになさったことがあります。私も『言語都市・パリ1862-1945』のときに、石黒さんからそれをお借りしました。しかし真っ黒の部分が多くて読めません。可能な限り活字に起こさないと仕方がないという結論になり、新組みで編集したのが1巻目と2巻目です。

それから第3巻～第5巻は、『あみ・ど・ぱり』を収録しています。これはパリから帰国した日本人が銀座に事務所を構え、そこで発行していた日仏文化交流誌です。これも日本人のパリ体験を追いかける場合に、とても大切な雑誌ですが、揃いで見ることはできません。私の所蔵分と、国会図書館の所蔵分をベースにして、大佛次郎記念館などから欠号を一冊ずつお借りして、可能な範囲で復刻をしてみました。

ここまでが配本の第1期で、新聞と雑誌で構成しています。配本の第2期（第6巻～第10巻）には、人名が三人入ってきます。そこにはパリの日本人社会のキーパーソンが並んでいます。それ以外は、『ジャポニズムと日仏文化交流誌』、『歓楽と裏面のパリ』というテーマによる編集です。

第3期（第11巻～第15巻）は『美術家のフランス体験』というテーマで3巻、それ以外のジャンルということで、『音楽のなかのパリ』と『映画のなかのパリ』を入れてあります。各巻に編者を配して詳細な年表をお願いしましたが、編者によってかなり凹凸があります。第二次世界大戦以前の美術雑誌に出てくる日本人のパリ体験は、その全体像を明らかにすることが難しい。それで2012年度に1年間、海外研究でパリ第七大学に籍をおいたときに、美術家のヨーロッパ体験を集大成する作業に取り掛かりました。第二次世界大戦以前の美術雑誌に掲載された、日本人美術家のヨーロッパ体験の記事と図版を、資料集にまとめる仕事です。作業は8割方進行しましたが、他の仕事が忙しくて、まだ詰めていません。

それから第4期には、『レビューのなかのパリ』『グルメのなかのパリ』と、『文学者のフランス体験』が2巻、森三千代の巻と『詩人のフランス体験』が入っています。こういう企画を立てるときに、なぜ金子光晴がなくて、森三千代の巻があるのか、疑問に思われる

方もいるかもしれませんが。復刻版を作るときの原則の一つは、稀覯本を収録するという事です。森三千代の場合は、稀覯本が一定数ありますので、それで1巻を編集することができます。しかし金子光晴や高村光太郎は、全集を見ればいいという読者が多いので、全集未収録の雑誌掲載記事が入ることはあっても、単行本が入ることはまずありません。

（４）日仏共同研究Ⅱ——『フランス・ジャポン』復刻版と、論集『満鉄と日仏文化交流誌『フランス・ジャポン』』（2012年）

次は「日仏共同研究Ⅱ」ということで、ゆまに書房から出版された『フランス・ジャポン』の復刻版と論集の話をしていただきます。先ほどお話をしました日仏共同研究Ⅰとも関わりがありますが、2010年3月にパリ第七大学で、科研の共同研究の最初のワークショップが開かれ、私も発表をしています。そのときにフランス側の研究者たちに、ある呼びかけを行いました。『フランス・ジャポン』は日本で全巻揃いで見ることはできません。フランス側との共同研究でなければ、復刻が困難です。そこで「一緒にやりませんか」と呼びかけたわけです。そのときに『ルヴュ・フランコ・ニッポンヌ』という雑誌の現物も、その場で1冊回覧して、フランスのどこかの図書館に所蔵がないかどうか、調査をしてほしいとお願いしました。

この『フランス・ジャポン』という雑誌は、1934年10月から49冊が発行されています。パリのシャンゼリゼ通りに、満鉄のヨーロッパ事務所があって、そこが発行していた雑誌です。たとえば1935年4月の第7号を見ると、現代日本詩人の作品が翻訳されています。83頁の下から2段目は「Yone Noguci」、つまり野口米次郎の詩が翻訳されています。一番下は「Akiko Yosano」、つまり与謝野晶子の翻訳です。このような組み方で、次のページまで翻訳が続いています。同時代の詩人では、西条八十も翻訳の対象になっています。

日本文学の研究者の多くは、フランス語を話せないとバリで1年間暮らすことはできないと、無意識のうちに思い込んでいます。実際には英語を使えれば、生活することは可能です。ただフランスでは公文書はすべてフランス語で出さないといけないと、法律で決まっていますから、在留許可証を取るときに、最後はパリ警視庁から呼び出しが来て、身体検査を受けます。そのときの召喚状はフランス語です。ですから最低限、電子辞書を使いながら、フランス語を読めるようにしておく必要があります。私も初級の文法は勉強し直しましたが、フランス語の文章を読むのは非常に時間がかかります。したがって私はふさわしくないで、監修者ではありません。このときは清泉女子大学の英文学科教授の和田桂子さん、私の連れ合いですが、彼女が監修をしています。

この雑誌を発行した満鉄のヨーロッパ事務所というのは、不思議なスポットです。日露戦争で日本がロシアに勝ったときに、中国東北部の鉄道の権利を譲り受け、それを経営していくために満鉄という会社が作られます。満鉄は第二次世界大戦以前の日本の企業としては、最大の企業の一つに成長していきます。公式的な歴史見解の側から言えば、満鉄という会社は、満州国と密接にリンクする、日本が満州を侵略していく際の重要なツールということになります。

ただ満鉄というのは一枚岩ではありません。満鉄の内部に日仏同志会という組織が作られて、芦田均・近衛文麿・松岡洋右・若槻礼次郎などが加わっています。シャンゼリゼ通りにあった満鉄のヨーロッパ事務所の所長は、坂本直道が務めています。この人は坂本龍馬の末裔です。坂本直道が松尾邦之助に編集を依頼して、『フランス・ジャポン』という日仏文化交流誌が実現する。もちろん満鉄の雑誌ですから、一つの性格として、満鉄のPR誌、別の言い方をすると、1930年代の日本の対外宣伝誌のなかに位置付けられる雑誌です。日本では揃いで見ることはできないために、これまではほとんど研究の対象になってきま

せんでした。

ところが松尾邦之助はパリで、フランスの知識人たちと交流があります。そして第二次世界大戦が始まる前になると、編集が松尾から小松清に引き継がれています。小松は行動主義文学の中心人物の一人ですが、この頃のフランスでは、人民戦線派が政権を取るわけです。その人民戦線派と小松は非常に近い立ち位置です。そのためにアンドレ・ジッドとか、アンドレ・マルローといった人脈が、『フランス・ジャポン』の周辺に集まってきます。小松は日本に帰国すると逮捕される可能性があるため、日本には戻らずに、パリでずっと活動しています。

そのように見ていくと、公式的な歴史見解で説明できる、中国東北部を侵略している満鉄の対外宣伝誌という言い方では、まったく捉え切れない性格が、この『フランス・ジャポン』には存在していることとなります。その意味で、『フランス・ジャポン』を通して見えてくる世界は、可能性として非常に面白いのではないかと思います。

復刻版の『フランス・ジャポン』と一緒に、論集として『満鉄と日仏文化交流誌『フランス・ジャポン』』を企画しました。全体の構成は、第1部が『フランス・ジャポン』その誕生から終焉まで、第2部は「満鉄—中国東北部からフランスへ」、第3部が『フランス・ジャポン』の政治学、第4部は「二〇世紀前半のパリの日本イメージ」、第4部が「資料編」となっています。

先ほど申し上げましたが、科研の日仏共同研究のワークショップの際に、『フランス・ジャポン』の共同研究への参加を呼びかけました。そのときにコレージュ・ド・フランス日本学高等研究所の前所長の松崎碩子さんが、真っ先に私の呼びかけに反応してくださいました。すぐに調査をしてくださったようで、次の日の朝にホテルに電話がかかってきました。それはコレージュ・ド・フランスに『フランス・ジャポン』が全冊揃っているという朗報でした。

そこで日本に未所蔵の号を、復刻のためにコピーさせていただけないだろうかとお尋ねしたところ、松崎さんが「どうぞ日本にお持ちください」とおっしゃいます。大変うれいお申し出でしたが、世界中でコレージュ・ド・フランス以外には、現存していない可能性のある号です。「万が一飛行機が落ちたら、資料は永久に失われますよ」と私が半分冗談で申し上げましたら、「コレージュ・ド・フランスに置いておいても、火災が起きれば焼けてしまいます」と笑って応じてくださいました。「いつお返しすればよろしいですか」と伺うと、「研究が終わってからで結構です」というお返事でした。

コレージュ・ド・フランスというのは、フランスでは最高の研究機関です。学生がいないので、通常の大学のような授業はありません。コレージュ・ド・フランスの教授に求められるのは、年に何回かのオリジナリティーのある講義を、一般市民を対象に行うことです。オリジナリティーを求められるということは、研究の最前線を作るということを意味しています。そういう場所で息づいている学問の世界が、松崎さんとのやり取りに、反映していると私は思いました。

(5) 日仏共同研究III——日本近代文学館・パリ日本文化会館共催行事「①展覧会：川端康成と『日本の美』—伝統とモダニズム」「②国際シンポジウム：川端康成 21世紀再読—モダニズム、ジャポニズム、神話を越えて」「③川端康成原作映画上映週間(2014年)と、②の本の刊行(2015年予定)

さて、今までお話ししてきたことと、昨年9月にパリで行った一連の催しは、ゆるやかにリンクしています。パリでは、日本近代文学館・パリ日本文化会館の共催行事という形で、川端康成展と、国際シンポジウムと、川端康成原作映画上映週間の三つの催しを行い

ました。

実は 2011 年の秋からスタートしたのですが、日本近代文学館の内部で周年記念事業委員会が立ち上がりました。日本近代文学館は創立から 50 周年、開館から 45 周年を迎えることとなります。それで周年記念事業を企画するということになり、私は評議員をさせていただいている関係で、周年記念事業委員としてお手伝いをさせていただくことになりました。

いくつかの企画の中に、展覧会の開催がありまして、最初は国内での催しを考えていたわけですが。一昔前ですと、日本近代文学館は夏目漱石展を、デパートで開催したこともあります。しかし今はデパートで、文学関係の展覧会を開くことは、非常に難しくなっています。それで文学以外のジャンルに橋渡しをして、展覧会を開けないかと考えて、東京都写真美術館や世田谷美術館の知り合いの方に話をしてみました。両館ともうまくいきかけたように見えたのですが、問題が生じてきて、なかなかコラボが成立しない。それで「いっそのことパリで企画を検討してみましようか」と話をし、皆さん半信半疑だったのかもしれないかもしれませんが、いちおうご賛同をいただきましたので、企画の原案を作ってパリに持っていきました。

ちょうど 2012 年度の 1 年間は、大学の海外研究で、パリ第七大学に籍をおかせていただきました。四月に着いてから、まだパリのアパルトマンに入居する前に赴いたのがパリ日本文化会館です。ここには国際交流基金のフリドマン日出子さんが勤務していらっしやったので、展覧会・シンポジウム・原作映画上映週間を開く可能性についてご相談をしました。行けるかもしれないという感触を得てから、パリ第七大学の坂井セシルさんが川端康成の研究者なので、坂井さんに相談をしました。そこから少しずつ話をまとめていく作業が始まったわけです。

それが最終的に 2014 年の秋に、一連の催しとして成立をすることになります。その過程では、難しい問題がいろいろと出てきました。そのことは省略しますが、川端康成展覧会は、日本近代文学館で何回かの試行展示を開き、試行展示を基にして、パリ日本文化会館で展覧会を開くという進行になっていきます。ただ私がパリに行って相談をした 2012 年は、最も円高の八月頃は 1 ユーロが 90 円でした。ところが催しが行われた 2 年後には、1 ユーロは 140 円台になります。ということは、円建てで計算すると、予算が三分の二に縮んだこととなります。ですから 2012 年度に立案した規模では、展覧会は開くことができず、縮小せざるを得ませんでした。

国際シンポジウムは 2 日間に分けて行われています。日本の研究者、ヨーロッパの研究者、アメリカの研究者、中国の研究者が、16 人集まってシンポジウムを開きました。1 日目にパリの日本文化会館で開催したときには、使用言語はフランス語と日本語です。日本文化会館にはフランス人の一般の方もたくさん来られますので、たとえば川端香男里さんは日本語で講演をされましたが、そのときはフランス語の通訳が付いています。2 日目はパリ第七大学で開いたので、研究者や大学院生が中心になります。使用言語は英語と日本語になっています。英語の発表者のときは、日本語の概要が事前に配付されます。逆に日本語の発表者のときは、英語の概要があらかじめ配られています。

ヨーロッパの研究者は、パリ第七大学の坂井セシルさん、コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所所長のジャン＝ノエル・ロベールさん、オリエンターレ・ナポリ大学のジョルジョ・アミトラノさん、ロンドン大学 SOAS のスティーヴ・ドッドさん、ベルリン自由大学のイルメラ・日地谷・キルシュネライトさんの 5 人です。アメリカの研究者はイェール大学のアーロン・ジェローさん、コロンビア大学の鈴木登美さん、シカゴ大学のマイケル・ボーダッシュさんの 3 人です。中国からは復旦大学の李征さんが参加してくださいました。日本の研究者の発表原稿も含めて、1 冊の本にする作業が、現在進行してい

ます。

川端康成原作映画上映週間が開かれたのは一〇月で、私は東洋大学の授業期間中なので立ち会っていません。しかし三つの催しの中で、最も好評だったのではないかと、密かに思っています。別の言い方をすると、文学はやはり難しい。文学のツールは言語が主になりますが、言語の壁はかなり高いわけです。映画の場合はヴィジュアルな媒体なので、言語の壁をある程度まで越えていきます。映画の上映という企画であれば、国際交流基金に申し込んでも相対的に通りやすいのかもしれない。

（6）日仏共同研究Ⅳ——『ルヴュ・フランコ・ニッポンヌ』復刻版（2014年）と論集『両大戦間の日仏文化交流』（2015年）

最後は「日仏共同研究Ⅳ」ということで、ゆまに書房から刊行された『ルヴュ・フランコ・ニッポンヌ』の復刻と、まだ未刊行の論集について話をさせていただきます。これが現在進行形の研究ということになります。前者の復刻の監修は、『フランス・ジャポン』の監修者を務めた和田桂子さんと、コレージュ・ド・フランスの松崎碩子さんの、お二人にさせていただきました。この雑誌もなかなか揃いでは見られず、『言語都市・パリ 1862-1945』の頃から、復刻したいという気持ちを持っていたのですが、実現することはすぐにはできませんでした。

本当に幸運だったことの一つは、何年前かは覚えていませんが、南青山に日月堂という古本屋さんがあって、その目録で突然『ルヴュ・フランコ・ニッポンヌ』の第11号が出てきたことです。これは日本にもフランスにも所蔵がない幻の号でした。さすがに何人かの方が一斉に申し込まれたようですが、私の所に回してくださいました。そのおかげで今回の復刻が可能になったわけで、大変ありがたく思っています。

ただ『ルヴュ・フランコ・ニッポンヌ』には、謎も残っています。第10号の情報は出てくるのですが、実際に発行されたかどうかは分かりません。今のところどこにも所蔵がないので、解題で断っているはずですが、それを外して、外してといっても、もともと存在しない可能性もありますが、復刻をしています。

これは1920年代にパリで、松尾邦之助が編集・発行していた雑誌です。第一次世界大戦は1918年に終結します。1920年代初頭のパリで、日本文学の情報は極めて限定されていて、参考書もほとんどありませんでした。1920年代に松尾邦之助が『ルヴュ・フランコ・ニッポンヌ』という、フランス語の日仏文化交流誌を創刊して、フランスの知識人と交流を深めていきます。そのなかにスタインベル＝オーベルランという、日本語は読めないけれども、親日派のフランス人が含まれていました。そのオーベルランと松尾の共訳という形で、1920年代に日本文学の翻訳が次々と出版されます。出版の進行と『ルヴュ・フランコ・ニッポンヌ』の発行は、時期的に重なっています。つまりこの雑誌は、日仏文化交流を考える際の、キーポイントの一つです。フランス俳諧詩の詩人たちも、『ルヴュ・フランコ・ニッポンヌ』～『フランス・ジャポン』という流れに近づいてきます。

今日の時点ではまだ未刊行で、三月末に出る予定の本なのですが、『両大戦間の日仏文化交流』という論集があります。巻頭に収録する座談会「両大戦間の日仏文化交流」は、昨年の九月にコレージュ・ド・フランスで行いました。川端康成展覧会やシンポジウムのために私がパリに行ったときに、和田桂子さんも同行して、松崎碩子さんと3人で話をしてきました。論集の第1章は「幻の日仏文化交流誌」で、『ルヴュ・フランコ・ニッポンヌ』を多角的に分析しています。

第2章は「両大戦間の日本研究と、松尾・オーベルランの仕事」というタイトルで、日本の王朝文化や中世文化、近世文化・仏教文化・女性文化を取り上げています。さらに第

3章は「日仏文化交流の記憶の場所」、第4章は「資料編」という構成です。

国文学研究資料館とコレージュ・ド・フランスを窓口にした科研の共同研究のフランス側研究者が、今回の論集には、全員ではありませんが、ある程度参加しています。編者の一人の松崎碩子さんはコレージュ・ド・フランス日本学高等研究所の所属で、フリドマン日出子さんは国際交流基金の所属です。寺田澄江さんと上田眞木子さんは INALCO の研究者で、ブリジット・ルフェーブルさんはリール第三大学の研究者です。ダニエル・ストリューブさんはパリ第七大学で、ジャン=ノエル・ロベールさんはコレージュ・ド・フランス日本学高等研究所の現在の所長です。それから、世古口亜綾さんはリール第三大学の講師で、長谷川=Sockeel・正子さんはギメ東洋美術館のライブラリアン。全部で9人のフランス側の研究者の方が参加しています。この論集の場合にはかなり、日本側とフランス側の研究者がタッグを組んだという感じの、日仏文化交流の論集になるのではないかと思います。

ほぼ予定の1時間を使ってお話してきました。約15年間の研究の行程を1時間にまとめてしまったので、概略的になったかもしれません。皆様の方から何かご質問がありましたら、その部分を少し掘り下げてお話ししたいと思います。とりあえず、ここでいったん仕切らせていただきます。どうもありがとうございました。

文字校正: 曲揚(早稲田大学大学院政治学研究科ジャーナリズムコース博士後期課程)